

# 片柳榮一教授の論文「人間的自由の現代的問題」に対するコメント

著者	白 忠鉉
雑誌名	聖学院大学総合研究所紀要
号	65
ページ	39-44
発行年	2019-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15052/00003615">http://doi.org/10.15052/00003615</a>

## 片柳榮一教授の論文

### 「人間的自由の現代的問題」に対するコメント

白 忠 鉉

ナグネ（洛雲海）訳

今回、第八回韓日神学者学術会議を主催し、私たちをお招きくださった上、歓待してくださった聖学院大学の皆様に心から感謝申し上げます。第一回から第八回まで本学術会議が進められる中、韓国と日本との間に、また長老会神学大  
学校と聖学院大学との間に、学問的、信仰的、神学的な交流ならびに交際が拡大深化されてきたことを思い、神に栄光を帰したく存じます。何よりも、今回の学術的対話は「キリスト教人間論」という主題のもと、両国の卓越した学者たちによる発表がなされることにより、学問的にも意味深い饗宴となることが期待されます。特に、片柳榮一教授のすばらしい論文「人間的自由の現代的問題」を読み、そのコメントへの参与が許されたことは、私個人にとっても非常に大きな喜びです。片柳榮一教授は宗教哲学者として古代キリスト教思想を中心とした研究を活発にしてこられた方であるため、この「キリスト教人間論」という主題を核心的に、洞察力あるすばらしい仕方で提示され、したがって、この論文から人間論に関する多くの深い諸洞察を得ることができます。

本論文は、文学と哲学と神学に関する多様な知識ならびに深い省察を基に、人間論という主題について自由の観点からアプローチするものである。特に、チェコの文学者フランツ・カフカ (Franz Kafka, 1883-1924) の『錠の前』、オーストリアの精神病理学者ヴィクトール・フランクル (Viktor E. Frankl, 1905-1997) の『夜と霧』ならびに『生きる意味』を求めて、ロシアの文豪フォードル・ドストエフスキー (Fyodor Dostoevsky, 1821-1881) の『カラマーゾフの兄弟』、ドイツの哲学者イマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724-1804) の『判断力批判』、ドイツの神学者ディートリヒ・ボンヘフアー (Dietrich Bonhoeffer, 1906-1945) の『抵抗と信徒』、そしてヒップボのアウグスティヌス (Augustine of Hippo, 354-430) の『三位一体論』などを多様な仕方で扱うことをもって、人間の自由に関する論議を豊かな、しかも深く踏み込んだ仕方で提示するものである。こうした論議を通して、本論文では人間が生の意味についてのコペルニクスの転回を通して生の意味を発見することが真の人間的自由であると主張され、その上、こうした真の人間的自由というものは人間自身の深き内奥において遂げられるものであると主張される。このような主張を周到綿密に展開した上、提示された片柳榮一教授に深い感謝と敬意を表する。

より具体的に探ってみるなら、本論文の序で、片柳教授はカフカの『錠の前』に現れる門番が錠の中に入れてくれるようにと願う田舎出の男に語った言葉、すなわち「誰も他にここで許可を貰う者はいない。何故ならこの入り口は、唯お前だけに定められているものなのだから」と語った言葉をもって、われわれの関心呼び起こし、想像を刺激して論議を触発させる。その後、本論文のI章では門番の言葉の意味するところを解明する一つのヒントをフランクルの文章から探し出し、それを転換、つまり「生の意味についてのコペルニクスの転回」と規定する。本論文によれば、転換とは人間が生について何が期待できるかと問うことではなく、生の方が人間に何が期待できるかを問うということ意味する。また、転換とは生において人間が自ら問う側としてではなく、問われる者として立たされているということ意味する。フランクルの個人的な体験においてそうであったように、本論文では、たとえば死の収容所のような絶望的状况

に身を置くことになったとしても、そのような生の状況についてコペルニクスの転回をするならば、人は自分が世界で唯一の人間であるという事実を明らかに悟ることとなり、自己の生を生きていくための勇気を得て、人間的自由を享受することになるのだと主張される。

本論文のⅡ章の冒頭で、片柳教授は、ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』に出てくる無神論者イワンの思想（神が存在しないとすれば、あらゆることを為し得る自由があるという思想）に対するドミトリイ・フョードロヴィッチの問い、すなわち『あらゆる無神論者の立場から見ると、悪業は許されるべきであるばかりか、むしろ必要欠くべからざる最も賢明な行為として認められる！』とこういうわけですね？』という問いを紹介することで、再びわれわれの関心呼び起こし、想像を刺激して論議を触発させる。その後、本論文ではカントの文章とボンヘファーの文章からその問いに対する答えを見つけ出し、それが提示される。本論文によれば、カントは、人間が神の存在の可否や神の報償懲罰の可否によって義務を遂行したり、悪行をしたりするというのであれば、それは人間自身が卑怯かつ卑屈であることを証明するものであると主張する。また、ボンヘファーは人間が「神なしに」生を生きていくことが人間の成人したことを示すものと主張する。もちろん、ここでの「神」とは、ボンヘファーによれば誤った神観念、つまり人間が窮境から抜け出せるよう助ける機械仕掛けの神観念としての神を指している。その後、本論文ではアウグスティヌスの陳述、すなわち「神を、この世、あるいはこの世の諸々の部分を支配するその権力を通して求める者たちは、……神から遠ざけられ、離れたところへ放り出される」という陳述を引用しつつ、アウグスティヌスと共に人間の深い内奥に、「この内奥よりさらに内奥に、宇宙、世界の創り主なる神が在す」と喝破する。その後、論文の結論として、片柳榮一教授は「この場所は、フランクフルトがコペルニクスの転回場所として、我々に示してくれた場所に深く連なっている」と主張する。

ここで、評者は本論文の論旨と展開について、いくつかの問いを提起することをもって、本論文の意図するところをより明確なものとしてみたい。

第一に、本論文は、一方で「生の意味についてのコペルニクスの転回」を通して真の人間的自由を発見することと、他方で誤った観念としての神ではなく人間の深い内奥にあるマコトの神と共に生きることとを結びつける。このように両者を結びつけること自体は良い試みであろうが、人間的自由と神の存在とを結びつけるということが果たして説得力ある仕方であるに進めることになるだろうかということについては、もう少し論議が必要であるように思われる。なぜなら、無神論という前提の上で人間的自由を主張する人々が依然多く存在するからである。たとえば、米国イエール大学で哲学を教えるシェリー・ケーガン(Shelly Kagan)教授は『死とは何か? (Death)』という著作において人間的自由(意志)を認めるはするものの、そこでの議論は有神論的前提を有するものでは全くない。そこで、ケーガン教授は、人間の死は個人の消滅であり、霊魂もなく、永遠の生命もないと主張するのである。そう主張しつつも、ケーガン教授は、人間はただ一度だけ自己に与えられる生に感謝し、その与えられた生を慎重に生きるべきであり、またそうすることができると、彼なりに説得力ある仕方で主張する。そのため、人間的自由と神の存在とを結びつけるということは、キリスト教人間論を扱う者であれば、必ずや取り組むことが求められるようなやっかいな難題であると思われる。したがって、どうすれば説得力ある仕方で両者を結びつけることができるのかということについて、この論文においてもより多くの論議がなされればと思われる。

第二に、本論文において考えられている人間的自由とはいったいかなる自由を指すのかということについて、問いを提起してみよう。カフカの文章とフランクルの文章に基づいた本論文は、主として一人の人間の個人的かつ実存的な次元における自由を指すものであるように思われる。死の収容所といった絶望的状况におけるコペルニクスの転回を通して生の意味を発見するということが、果たして人間的自由の全き実在を真に表し得るのかということについて問うて

みよう。特に、フランクルの「ロゴセラピー (logotherapy)」、すなわち「意味中心療法」を通して意味を発見するということが、真に人間的自由の實在を十分表すことができるかどうかを問うてみたい。人間の個人的・実存的・肉面的な自由の他にも、人間的自由に関してはそれらとは異なつた諸アプローチも、あるいは必要ではないかと思われるのである。人間的自由の總体的實在を表そうとするなら、構造的観点からアプローチすることもそれに並行させる必要はないだろうか。特に、人間が社会の悪なる体制や制度や構造の中で、ただ意味を発見することをもってではなく、諸悪をいかに改革・変革するかという点についても扱う必要はないだろうか。たとえば、ラインホルド・ニーバー (Reinhold Niebuhr) が一九三二年に出版した『道德的人間と非道德的社会 (Moral Man and Immoral Society: A Study in Ethics and Politics)』においてそうであつたように、社会の諸構造に関してもそれを扱つてこそ、人間の自由の全き實在を表すことができるようになるのではないかと思われるのである。

第三に、フランクルの場合、たとえ死の収容所におけるような絶望的状况の中であつても、彼はそこでのコペルニクスの転回を通して生の意味を発見し、受けた傷から癒やされ、人間的自由を享受することができた。それなら、死の収容所において死んでいった数多くの人々に関して、われわれはいつたいどのように語ることができるであろうか。戦争や独裁、抑圧そして差別など、諸悪に基づく構造の中で何の力もなく死んでいった数多くの無名の人々について、われわれはいかなる言葉を発し得るであろうか。彼らは死に赴きつつある中でなお生の意味を発見し、人間的自由を享受しつつ死んでいったのだと言うこともできようが、力なく苦しみを受ける中で自ら転換などなし得なかつた大部分の人々について、われわれはいかに言及することができるだろうか。さらにまた、悪構造の中で致し方なく悪行を犯しつつも自ら生の意味を発見し、しかも依然として悪構造の中で悪行を犯し続けているような人々について、われわれはどう語ることができるだろうか。

第四に、カフカに関する一つの話が思い起こされる。カフカ自身は文学を通して実存的に意味ある生や自由を追求し

たかのもしれないが、実際のところ、本人自身は恐ろしく厳しい父親から迫りくるとつもない恐怖と困難とを克服するといふべきでなかったのである。彼は父親にも言う意欲も出ず、父親に送る手紙（すなわち『父への手紙』[*Brief den Vater*, 1919]）を書きはしたものの、最後までそれを父親に送ることもできないまま死んだのであった。つまり、彼は、一個人として、人間自身の実存的意味を発見しようとそれを追求したのかもしれないが、それが人間関係における真の人間の自由に進みいくようにすることはできなかったようなのである。そうであるなら、人間の自由の総体的実在というものを十分に表すために、より良い諸アプローチが必要ではなからうかと思われる。

第五に、人間的自由を神の存在と結びつけるとしても、われわれはその神がどのような神であるかということに関しては、さらに別の探究を総体的に遂行する必要がある。カントにとつての神は、単に裁判官としての神あるいは為政者としての神ではなく、理性的宗教ならびに理性的倫理の中で作動する神である。しかし、そのような神が聖書の神と同一の方であるとは言えない。ボンヘファーにとつての神は、人間が窮境から抜け出せるよう助けてくれる全能の神ではない。むしろ、彼の神は弱さや苦しみにおいて現れる聖書の神である。そして、アウグスティヌスにとつての神は、ただ人間の内奥深きところに存する神ではなく、三位一体なるお方としての神である。それゆえ、われわれがキリスト教人間論を探索しつつ人間的自由と有神論とを結びつけることはしても、その神がどのような神であるかということに関しては、われわれは明らかな立場を具備する必要がある。これらの点を考慮するなら、片柳榮一教授にとつて、神はいつたいどのようなお方なのであろうか。人間的自由の実在をより総体的に表すために、三位一体なるお方としての神存在を前提とするなら、こうした結びつけの作業はいつそう説得力ある仕方で提示され得るだろうか。